



水稻

販売開発部
営農指導員 小棚 哲義

例年、斑点米の発生は等級落ちの主要因となっています。同じ被害を繰り返さないためにも、飼料用米を含め、地域全体で適期に対策を行うことが必要です。

斑点米カメムシ対策

近年は、登熟期間中の猛暑により、白未熟粒および胴割れ粒が多く発生し、品質の低下の原因となっています。高温が続く場合は、間断かんがいの間隔を狭め、地温の上昇を抑えましょう。一方で、冷害対策においても、水管理が重要です。冷害は、主に中干し以降の時期に、最低気温17℃以下の日が続いた場合、減収を招きます。特に出穂後の開花期に低温にあつと、受粉が上手く行われず不稔もみが多くなります。こうした時期に低温が予想される場合は、できる限り深水で管理し、地温を確保しましょう。

高温・冷害対策

本年は田植え以降も比較的気温が高く推移したため、圃場によりばらつきはありますが、生育は平年並み〜やや早く推移しています(6月中旬時点)。7月上旬には早生品種で出穂期を迎えることから、今後は登熟歩合を確保することや、等級格落ちの原因となる被害粒の発生を未然に防ぐことが重要となります。

カメムシの生態と行動

稲を加害するカメムシは体長4mmから20mm前後と大小さまざまで、繁殖や加害方法は異なりますが、行動パターンを知ることによって統一的な対策が可能となります(写真②参照)。

カメムシの多くは、水田近くの雑木林や雑草地で越冬・繁殖し、稲の出穂が始まると水田内に侵入、産卵・増殖したり、一部の成虫は若い穂を吸汁したりします。その後、水田内で孵化した第二世代の幼虫が、乳熟期以降の穂を吸汁し、不稔もみや斑点米の被害が拡大します。

このような行動パターンから、①生息地となる畦畔周辺の除草、②水田侵入初期の成虫駆除、③第一世代の加害防止(幼虫駆除)が必要となります。

防除方法

- ① 防除のポイントは、次の3つです。
- ② その年の発生時期・発生量を把握する。
- ③ 畦畔周辺の除草は出穂2週間前までに済ませる。
- ④ 品種によって出穂時期が異なるため、周辺圃場を確認し、適期での薬剤散布を行う。

また、登録のある薬剤でもカメムシ類の卵には効果がありませんので、産卵前の成虫と、孵化後の幼虫を2回に分けて防除するようにしましょう(表③参照)。散布時間帯は、カメムシ類が稲穂にいる朝や夕方の方が効果的です。

5月の分析経過について

合計12点

残留農薬分析点数	多成分一斉分析
春ニンジン	3点
ソラマメ	2点
タマネギ	1点
小玉スイカ	1点
夏ネギ	2点
トウモロコシ	2点
春トマト	1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数 …… 合計39点

写真② 管内でみられる主なカメムシ [写真提供元: シンジェンタジャパン(株)]



表③ カメムシ類の防除時期と登録薬剤

	散布時期	主な登録薬剤
1回目	出穂期〜穂揃期	スタークル粒剤、キラップ粒剤、スタークル豆つぶ など
2回目	乳熟期ごろ	スタークル液剤10、トレボン粉剤DL など

※出穂期…全体の4〜5割が出穂したころ ※穂揃期…全体の8〜9割が出穂したころ
※乳熟期…穂揃期の7〜10日後

農業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary



タマネギ

大網経済センター
営農指導員 鶴沢 悠人



30年産を振り返って

昨年10月の台風21号の影響で育苗中の苗が被害を受け、苗が不足し、作付けを断念した圃場も多く見受けられました。また、年明けの2月以降に降雨が少なかったことや、べと病の発生などもあり、球の肥大状況は悪く、全体的に小玉傾向での出荷となりました。等級別の発生比率もS、2S級が非常に多く、全体の集荷量は、前年の5割程度に留まりました。

タマネギの主要病害虫

べと病(表①参照)

べと病は、湿度が90%以上、気温が10〜20℃の温度条件を好みます。病気が進むと病斑部が折れやすくなり、最後には枯死に至ります。症状としては、下葉を中心に黄色く枯れたり、黒いすす状の菌糸が発生したりします。初めは圃場の一部に発生し、徐々に圃場全体に広がっていきます。展着剤を加えて、葉の裏までしっかりと薬液がかかるように散布してください。

腐敗病(表①参照)

腐敗病は枯れた葉や傷口などから細菌が侵入して感染します。春先に温度が上昇してくると葉の枯死や鱗茎の腐敗などの症状が発生します。腐敗

した株は周囲の感染源になるため、早めに圃場の外で処分してください。防除は気温が上昇する2月下旬から行いましょう。また、発生初期にバリダシン液剤5などで防除に努めましょう。

ネギアザミウマ(表②、写真①参照)

主にネギ類などのユリ科野菜に発生する害虫です。雨が少なく乾燥傾向の場合に多発する傾向があるため、注意が必要です。成虫は体長1mm程度で細長く、褐色で、幼虫は体長1mm以下で黄色く細長いのが特徴です。成虫・幼虫ともに食害し、食害痕はかすり状の白斑となります。多発すると葉全体が白化し、生育抑制や枯死を引き起こします。発生状況に応じ、7〜10日間隔での防除が必要です。



写真① ネギアザミウマによる被害

表① タマネギに登録のある殺菌剤

薬剤名	希釈倍率	使用時期	使用回数	適用病害虫名	作用特性
ジマンダイセン水和剤	400〜600倍	収穫3日前まで	5回以内	べと病、灰色かび病、灰色腐敗病 他	予防
メジャーフロアブル	2000倍	収穫前日まで	3回以内		予防・治療
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	べと病、白色疫病 他	予防・治療
バリダシン液剤5	500倍	収穫3日前まで	5回以内	腐敗病	予防・治療

表② タマネギに登録のある殺虫剤

薬剤名	使用量・希釈倍率	使用時期	使用回数	適用病害虫名
ダイアジノン粒剤5	3〜5kg	播種時または定植時	2回以内	タネバエ、タマネギバエ、ケラ、コオロギ
ファインセーブフロアブル	1000〜2000倍	収穫3日前まで	3回以内	アザミウマ類